



Title	企業家
Author(s)	ブレンターノ, ルーヨ; 加来, 祥男//訳
Citation	経済學研究, 44(4), 168-179
Issue Date	1995-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31988
Type	bulletin (article)
File Information	44(4)_P168-179.pdf



[Instructions for use](#)

< 翻訳 >

企 業 家

ルーヨ・ブレンターノ

加 来 祥 男 訳

以下は、Lujo Brentano, *Der Unternehmer*. Vortrag gehalten am 3. Januar 1907 in der Volkswirtschaftliche Gesellschaft in Berlin, 1907 Berlinの全訳である。

ご来席の皆さん

今日皆さんの前で話をすることに私は大きなためらいを感じています。企業家と今日の経済秩序におけるその位置についてお話するわけですが、これは最近になって様々な意味で論議を呼んできた問題であります。けれども、私がある種の重苦しさを感じるというのはこのためではありません。私を悩ませているのは、むしろ、この問題を扱おうとすれば若干の概念規定をしなければならない、という点にあります。だが、概念をめぐる議論というのは、誰にとっても楽しいものではありません。とはいっても、まさに論議の対象となっている問題においてお互いに分かりあおうとすれば、いくつかの概念に関して予め一致点を見いだしておかねばならないのです。

私たちが明らかにしておかねばならない最も重要な概念は、生産というそれです。生産するというのはどういうことなのでしょうか。

そうでないものから始めることにしましょう。

生産するというのが物質を創り出すというほどの意味をもたないということは、皆さんがご存じのとおりです。現存のすべての物質は初めから存在しています。そうした物質のどの原子も、なくなってしまうということはありません。同じように、人間は原子を付け加えることはできません。人間は、物質を創り出すこともなくしてしまうこともできないのです。物質に

ついて変化しうる唯一のことは、それが人間に対してとっている形態です。固体は気体に、気体は液体に変化することがありますし、逆もまたしかりです。そして、そのいずれもが異なった属性を有することがあります。けれども、現存の物質の総量は変化しません。

物質のこうした形態変化は、化学的なものであれ機械的なものであれ、力の働きによって引き起こされます。私たちは、物質の状態を変えるものを、それが静止状態から物質を作動させるものであれ逆であれ、すべて力と名づけます。こうした力はどこから生じるのでしょうか。物質と同じように、エネルギーも創り出せるものではありません。現存のすべての物質が初めから存在するように、現存のすべての力もまた初めから存在しています。どの原子もなくなることがないのと同じように、力のわずかな部分もなくなることはありません。また、物質と同じように、人間は力を新たに創り出すことはできません。ここでもまた、生じうる唯一の変化は、現存のものを別の形態に転化することです。あるエネルギーが同じ量の別のエネルギーに転換されるのです。マイヤーRobert MayerとヘルムホルツHelmholtz以来、全世界に存在するエネルギーの総量は常に同じ大きさだということを私たちは知っています。

このように、物質と力とははじめから存在しています。それらを増やすことも減らすことも

できません。生じうる、そして現に絶えず生じている唯一のことは、現存の物質、現存の力の形態変化です。そうした形態変化は、2つの方法で生じる可能性があります。

1つには、盲目に支配する自然力の作用としてです。例えば、酸素と窒素の結合から空気が生じます。また例えば、様々な地質ができました。土地には、人間にとって有用な植物や動物も有害なそれも成育しています。

いま1つには、ベーコンBaconが名づけたように、自然の下僕にして代弁者である人間が、自然からこうした形態変化の秘密を学びとり、現存の物質が人間の願望にそった形態をとるよう自然力を導きます。

盲目に作用する自然力の働きであれ、あるいは人間による目的意識的な自然力の管理によるものであれ、こうした形態変化が生産と名づけられます。生産するという事は、物質を創り出すというようなことではありません。それならば、創造ということになりましょう。生産するという事は、既に存在している物質と力の姿態変換にほかならないのです。

以上のことはきわめて自明でありますから、ここでそれをわざわざ強調することは、恥ずかしいような感じがいたします。それでも、残念ながら、こうした単純な真実をもう一度示しておくことが今日でもなお必要なのです。

経済学をかじった人であれば誰でも知っているように、ケネー-François Quesnayとその学派である重農主義者は、農民、鋤夫、採石労働者が生産の唯一の機関であり、その他のすべての社会階級は、商工業者を含めて不生産的であると教えてきました。この理論の基礎には、次のようなことがあります。即ち、重農主義者は、最初にあげた人々が新たな創造によって物質を産出する、と考えました。商工業者の活動によって、この物質は他の形態をとることはありえても、存在する物質の量はそれによっては増加しない、というのです。彼らによれば、物質の形態の変化によって、その有用性は確かに増し

ます。しかし、重農主義者は、物質の量を国民の富の大きさの条件だと考えていました。彼らは、この大きさを現存の有用性の大きさによってではなく、現存の物質の大きさによって測定したのです。

アダム・スミスAdam Smith以来、この理論の誤りは幾度となく証明されてきました。それにもかかわらず、今日再び、私たちは、この理論を復活させようとする試みに出くわしています。農業はその利害が他のすべてのそれに優先する生業であるということを示すために、今日また、土地が富の唯一の源泉であり、土地から得られた物質が唯一の富とされています。そして、お分かりのように、この新重農主義は現在のドイツ最大の政党において熱烈な賛同を見いだしてきました。今日、無教養な多くの人々が、長子相続権は事柄の性格からいってどの時代にも当然であるとする理論を繰り返しています。経済学の理論は他の学問のようにはいきません。他の学問では、一般的に認められるためには、ある理論の正しさを証明すればそれで十分ですし、誤りが証明されれば、それは忘れ去られてしまいます。経済学では、強力な政党の利害と一致し、そして、そうした政党が強力である限りにおいてのみ、正しい理論は認められます。他の政党が強力になれば、誤った理論も、それが強力な者の利害のために役立つようにみえる限り、再び勢力を得ることになります。

それだからこそ、生産は物質の創造とは無縁だということを思い起こしておくことが、今日でも再び必要なのです。重農主義者よりもずっと以前に、ベーコンは『新機関』Novum Organonのなかで次のように書いています。「生産に関しては、人間は、自然から与えられた肉体である物質を分離したり結合したりすることしかできない。その他はすべて、自然それ自体に由来する」と。言葉を換えていえば、自然がその前提としている条件が満たされれば、自然の活動を支配する法則にしたがって、新しい現象が成立するのです。

このことは、商工業にとってと同じく、農業についてもあてはまります。農民も何ら物質を創り出しません。農民は、現存の物質の分離と結合をとおして、その形態を変化させるにすぎません。農民は鋤や鍬で土壌を分け、畔間に種をまきます。それは、土地と大気のなかにある自然力をそれに作用させ、その影響のもとで燐酸、窒素、カリといった植物の栄養素を植物、穀物、花に育て上げるためです。したがって、農民は物質を創り出すのではなく、自然力の目的意識的な管理によって、現存の物質が人類の欲求にとって使用できる形態になるようにするだけです。工業労働もまったく同じことを行います。それは丸太を土地から切り離します。丸太は地球の引力によって倒れます。工業労働は丸太を板に分け、これを適当な形に切り、それを削って滑らかにし、相互に組み合わせ、こうして、物質を机や椅子、その他の何らかの有用な形にします。物質に対する関係における農業活動と工業活動との唯一の相違は、工業活動によって、物質は私たちが直接に利用できる形態により近くなる、という点にあります。けれども、望ましい形態を得るうえで、時によっては、農業もまた工業活動によって、それも、より少ない費用の支出で、代替されることがあります。以前には、赤い染料を得るために広い土地に茜が植えられていました。化学工業によるコールタールからの赤色染料の製造は、この植物の栽培を世界中どこでも採算の合わないものにしてしましました。かつてエアフルト地方では青色染料を得るために、広汎にタイセイが植えられていました。交通の発達とともに、この栽培は、より安価なインジゴに対してもちこたえることができませんでした。そして今日では、ドイツの工業がコールタールから製造するインジゴが、ベンガル地方のインジゴ植物の栽培を収益の上からないものに始めています。これまで農業がより高い費用で産出していたものをより少ない費用の支出で製造するからといって、化学工業は不毛でしょうか。あるいは、もし農業のなかで

産出される肥料としての窒素よりも安価に、空気から窒素を得ることができるようになれば、国民経済の生産性の低下といったことが嘆かれるのでしょうか。また、例えば、染料のような工業製品の製造に充てられた5労働日によって、私たちが国内の農業で10日間の労働によって製造できるのと同じ量の穀物を外国から調達できるとしたら、商業は生産的ではないのでしょうか。そうだとしたら、より効率的な形態変化は生産的ではなく、より非効率的な形態変化が生産的だということになります。

しかし、こうした不条理は数多くあります。とくに、まったく教養のない人々に対しては、そうした不条理が無責任な人々によって煽動の材料として使われる可能性があります。生産の本質を誤って考える第2の点はより深刻です。

つまり、生産は物質の創造と同一ではありませんし、さらに価値の創造とも同じではありません。それはまた、有用性の創造とも決して同じではありません。

生産するということは、まず第1に、決して経済的な事象ではなく、技術的なそれにすぎません。私がさきほど申しましたように、生産というのは、物質と力とが別の形態をとることを意味しています。それだけでは、これらがそれによって人間のために有用になるということにはなりません。肥えた耕土を流してしまうような豪雨による土地の形態変化は、被害を齎すものです。人間の略奪農法によって引き起こされる形態変化も、それに劣らず被害を齎します。したがって、自然力の盲目的な作用によるものであれ、あるいは人間による自然力の管理によるものであれ、そうした形態変化が引き起こされれば、生産によって有用性がなくなることも、新たに創り出されることもあります。原因が何であれ、同一の形態変化が有利にも不利にも作用することさえ有り得るのです。例えば、包囲された都市における火災は、包囲軍にとっては好都合ですが、包囲されている側にとっては不都合です。生起した技術的な事象が有用である

か有害であるかは、形を変えた物質が人間と関係を持つようになってはじめて、はっきりします。形を変えた力についても同じことがいえます。生じた形態変化が有用であるか有害であるかのいずれの作用をもつのは、人間の欲求で測って示されるのです。形態変化によって物質や力が人間の欲求を満たすのに適するようになれば、そうした有用性が生まれたり、あるいは既に存在している有用性が高められたのです。逆の場合には、有用性は減少したり、消失したりしました。

盲目の自然力によるものであれ、人間による自然力の目的意識的な管理によるものであれ、こうして引き起こされた形態変化が新たな有用性を生み出すと仮定しましょう。こうした有用性はそれ自体で既に価値をもっているのでしょうか。

そうではありません。人間の手による形態変化をとおして創り出される有用性の場合、それ自体は決して価値ではありません。

各人がただ自分自身の経済のためにだけ有用性を作っていた時代には、様相は異なっていたかもしれませんが。当時、各人は自分自身が欲しいと思うことによるのみ生産しました。したがって当時は、人間によって作られる有用性のすべてが価値でもありました。分業と交換を基礎とする今日の我々の経済組織では、そうではありません。そこでは、自分自身の必要のために生産されるだけでなく、他人への販売のためにも生産されます。そこでは、新しい生産物が価値をもっているかどうか、どの程度の価値をもっているかは、単に生産者だけによるものではありません。それは、欲求を満たすためにその生産物の提供をうける人々の判断によって、即ち、そうした人々が生産物をそのために適していると認めるかどうかによって、決まるのです。生産物が大きな有用性をもっているとしても、そのことでその生産物が価値をもっているということにはなりません。どれだけの発明者たちが厳しい困窮に耐えねばならなかったこと

でしょう。というのは、発明家の生産物の提供を最初にうけた人々は、それらが自分たちの欲求を満たすのに適していないと考えたからです。既に亡くなったグルーソンGrusonが私に語ったことですが、チルド鋳物を発明したとき、彼の生産物を提供された人々がそれを信じなかったために、彼はほとんど破産状態に陥りました。さらに、ある生産物が技術的にいかに優れているとしても、そのことでその価値が高いということにはなりません。**ミレーMilletが有名**な天使の絵を市場に出したとき、それによって、彼は2500フランを受け取りました。まだ彼の仕事の意味が認められていなかったのです。芸術通の評価ができあがった後で、同じ絵が途方もない価格で販売されました。間もなくこれは80万フランになりました。さらに、生産者がどんなに勤勉で朝早くから夜おそくまで働いて驚くほど多くの生産物を完成させても、彼の生産物は、その本人が満腹するほどの価値さえもたないかもしれません。昨年の家内労働の博覧会に出された製品のことを思い出していただきたいのです。

このように、生産者は、まずは物質や力の形態を変化させるだけであって、財を創り出すではありません。生産物は、それが欲求を満たすのに適していると考える誰かがいてはじめて、財になりますし、それはまた、そうした程度に応じて価値をもちます。もう1つの事例をあげましょう。生産と価値の創造とが広い範囲で同一視されていることを考えますと、とくに劇的であっただけに、これは、ここでとりあげるのにふさわしいものです。ビスマルク侯がドイツにタバコ専売を導入しようとしたとき、侯はシュトラスブルクの王立タバコ工場を拡張させました。ドイツのあらゆる地域に販売支店が設置されました。シュトラスブルク製品の競争をとおしてドイツの私的経営の収益をまず減らそう、という考えからでした。タバコ専売導入に際して取用がなされる場合、少額の補償を支払って済ませようというわけです。私的経営は、

問題点を察知して、抵抗しました。全ドイツ中に、シュトラスブルクの葉巻を中傷するアジテーションがなされました。これをおとしめるような称呼が広がりました。その結果、エルザス＝ロートリンゲンを除くドイツでは、誰もシュトラスブルクの葉巻を吸おうとはしなくなりました。支店は廃止されねばなりませんでした。ついには、様々な国から保養で高地に来ている人々に販売するために、数百万本の葉巻が費用以下の価格で少数のスイス商人に委託され、残りは煙突から煙りとなって消えました。

シュトラスブルクの製造業者が生産したのは何だったのでしょうか。彼らはタバコの葉を葉巻に変えました。彼らは葉巻を生産したのであって、財や価値を生産したわけではありません。一般の人々はその葉巻について何も知ろうとはしませんでした。葉巻は負の価値しかもたなかったのですが、それはただ、葉巻が自分たちの欲求を満たすのに適していると考える人々が十分いなかったからです。

しかし、生産が財ないし価値の創造と同じであるという考えかたの誤りは、もし必要であれば、その命題を逆にして、価値創造が生産であるといってみると、一層はつきりするかもしれません。これまで無価値であったものがそのままの形で価値をもつようになったり、また、すでに価値をもっていた別のものがそれ以上の形態変化を経ないままでその価値を増すということ、私たちは日々見えています。こうした価値の増大は社会的な事象によって生じるのですが、そうした事象は、当該のもの所有者によっても予想されないことがしばしばですし、多くの場合、所有者はそれに立ち向かったりすることさえあります。いま申しましたような事象によって、しばしば無価値なものに欲求充足のうえでの意味が付加されたり、また、わずかな価値しかないものにより大きな意味が付け加わったりします。その所有者がこの事象にどのようにかかわっているかにかかわりなく、それらは価値を得ます。まずは燃料として、次いで照明、

染料、甘味料などを得るために、石炭の有用性がわかったとき、数百年にわたって不毛な岩石として負の価値を有していた炭田は、大きな価値をもつようになり、その価値は増大しました。炭田の所有者は、こうした認識の進展に何らかかわっていません。都市の地所は、それ自体に変化がないとしても、人口の増加とともにその価値を増大させました。そして、ポーランドの土地所有者は、ポーランド人としてはプロイセンの植民政策に懸念に反対したにも拘わらず、土地所有者としては、そこから、農場を以前の数倍の価格で売ることができるほどの利益をうけました。価値上昇にあたってみられるのは、まさに、あるものに価値を賦与するのは生産要素の使用ではなく、それが人間の欲求に対して有している関係である、ということです。

生産と価値の創造とを同じ概念だとする、広く普及している、広い考えが否定されるとしたら、価値の創造を1つの卓越した生産要素の活動である労働と結びつける、狭い考えもまた否定される、というのは当然のことです。労働もまた、まず第1義的には、形態変化を引き起こす技術的な事象にすぎません。この形態変化は、価値の増大ともその減少とも結びつきうるものです。このうちのいずれが現れるのかを規定するのは、形態変化のために用いられた社会的に必要な労働時間の多少ではありません。1生産物の価値は、自然力の盲目的支配によるものであれ、人間による自然力の目的意識的な管理によるものであれ、その生産物が人間に対して有している関係によって決まります。

このように、価値を創造するのは、誰が生産者であっても、生産者ではありません。そうではなくて、情勢、即ち、分業と交換に基づく経済組織を一部とする社会関係です。そして、創造のために必要な原動力をその1つの要因として理解するとしても、そこでは、価値を創り出す要因というのは問題になりえません。あるものの価値を規定するのは、それが欲求充足に向けられる状況ですし、価値の形成と変化は、財

に根差しているかもしれませんが、それと同じく、その物が充たす欲求に根差している可能性もあるのです。

けれども、私たちの経済は、新しい価値を創り出すように努めているのではないでしょう。確かにそうです。経済では、生産によって生じた形態変化が経済的にも生産的であることが要求されます。

目標が達成された場合、その功績を当然うけるべきもの、というのは何も存在しないのでしょうか。

もちろん、それは存在します。ある生産物が人々に提供される状況は予想することができます。人間の欲求は予測できます。そして、生産要素は、こうした欲求に対応する生産物の製造に向けられます。

こうした生産要素は、単に、通常3つの生産要素といわれている「自然、資本、労働」だけではありません。保守的な著述家であるラヴェルニュ＝ペギリエン Lavergne-Peguilhen、ペルクホーフェン Pelkhoven、アドルフ・ヴァグナー Adolf Wagner が、それらに国家を付け加えているのは全く正しいことです。というのは、国家は、その存在、社会制度、管理、民法上の秩序、国際法をとおして、経済生活に決定的な影響を及ぼすからです。しかし、国家を付け加えても、生産要素の数はまだ完全にはなりません。生産にあたってはいずれの場合にも、人間が自由な財として享受し、また、私たちが文化的成果の名称でまとめている過去の社会生活の全体も影響を及ぼします。

けれども、こうした様々な生産要素を1つの新しい製品に結びつける要因は何なのでしょう。

それは、ただ1つ、人間の精神だけです。人間の認識と意志は、それによって新しい生産物を作り出す原動力です。人間の精神は欲求を予想します。人間の精神は生産要素を選択します。欲求が充たされるためには、そうした生産要素が分けられたり結びつけられたりしなければ

りません。人間の意志は物質と力の形態変化を引き起こすものですが、そうした形態変化によって有用性が創り出されます。そして、この有用性については、それが欲求充足に適していると認められることを、人間の精神は期待します。要約しましょう。現存の物質が人間の欲求に一層適合するようになるということを期待して、人間の精神は、有用性という考えを現存の物質のなかに埋め込みます。この期待があたっていれば、生産者は技術的に生産するだけでなく、さらに新たな価値も創造したということになります。その活動は経済的にも生産的だったのです。しかし、新生産物の価値は生産者によって創り出されたものではありません。価値は、新生産物がそれに役立つべき欲求に対処する状況の作用なのです。人間の精神は、生産要素の動きを誘導したにすぎません。人間の精神がこの機能を正しく果たせば、つまり、状況を正しく予見し、適切な生産要素を用いれば、その価値をこえる剰余価値ができたのです。剰余価値が生まれなかったとしたら、それは、人間の精神がその機能をうまく果たせなかったという印です。技術的には生産したけれども経済的には生産しなかったということになります。

けれども、私たちにとってただ1つの生産要素であることが明らかとなった、こうした精神、こうした認識と意志の担い手とは、誰なのでしょう。今日の経済組織ではこれが企業家です。

では、誰が企業家なのでしょう。

企業家であるということが出来るためには、3つのことが必要です。

[1] 生産物の製造に必要な生産要素の処分権を手中に収めていること（生産ではなく、単なる売買とそこから利潤を得ることが問題になっている場合には、現在あるいは将来、欲求充足のために他人に販売する財の処分権を有していること）

[2] 一定の生産目的に役立つよう、これらの生産要素を決め、それを自由に処理すること（利潤を得るための売買にあつては、一定の時

点で市場から買い戻し、あるいは市場に売り出すこと)

[3] それを自己の計算と危険負担で行うこと

これらが、企業家が果たさねばならない3つの機能です。これらの3つの機能を果たす人がいれば、それが企業家ということになります。

このことによって、私は2つのことを言いたいのです。その1つはやや消極的なことであり、いま1つはやや積極的なことです。

やや消極的なことからとりあげることにしましょう。ここで私が言いたいのは、うえの3つの機能のうちの1つが果たされない場合には企業家とはいえない、ということです。ですから、株式会社の取締役は企業家ではありません。たたきあげの成功者の1人であるエミール・キルドルフ Emil Kirdorf 枢密顧問官は、繰り返し次のように述べています。「私たち株式会社の取締役も、企業の従業員であり、企業に対して義務と責任を負っている」と。ここでは、取締役に欠けている、企業家の属性としての基本的な要件がきわめて的確に示されています。確かに、一定の生産目的のために生産要素を定め、それを自由に処理するという第2の要件は、取締役によっても何の制限もなく行われえますから、これについては企業家は何かということはありません。しかし、取締役の行動一切について企業家が全く関知しない場合でも、取締役は、企業家の意志を委譲されているものとして行動するにすぎません。取締役自身は常に生産要素の1つにすぎません。企業家は契約によってこの生産要素の処分権を得ます、そして、取締役の仕事は、企業家によって他の生産要素と結び付けられて新生産物となります。したがって、第1の企業家機能の遂行に関連づけて取締役に固有の仕事の問題にすれば、取締役は主体ではなく客体です。そして、同じように、企業家の第3の機能は取締役にっては果たされません。取締役が企業家の委譲者として生産要素を処分するように、やり方によっては、企業家に対して

責任を負うことがあるかもしれません。しかし、その責任というのは、委託者に対する従業員の責任にすぎません。利益と損失は、取締役を第1の生産要素として選び、彼を雇用したのと同じく解雇することのできる委託者の手許にとどまります。企業の成功と失敗は取締役の行動に大いに左右されるかもしれませんが、また、取締役は企業の中核であるかもしれません。しかし、物的な責任は常に、取締役がその名義で行動する人にあります。「下働き人」という用語は状況を特徴づけるにはきわめて不適切なものでしょうが、それでも、取締役は常に職員にすぎません。自ら行動するのではなく、適材を適所に就け、そこにとどめておくことは、国王の英知と等しく、企業家の英知であります。企業家がこれを行えば、適材によってなされた成果のすべては彼が作ったものですし、同じように、適材を解雇することによってもたらされる災難も彼が作ったものです。これは、共和国において、国や国民の事実上の指導者の地位と同じことです。

さて、私は積極的な側面もお話しようと思えます。それは、先に述べた3つの機能を果たす人がいた場合、それが企業家だということです。ということは、決して1種類の企業家だけがいるのではなく、自己の計算と危険負担で消費できる生産物を完成し、販売するような企業家もいる、ということです。完成品の工場主あてに販売する原料・半製品・補助材料の生産者は、完成品工場主と同じく企業家ですが、それだけではありません。提供者の計算と危険負担で独立の商品として市場に出される多種の財が存在するのと同様に、多種の企業家が存在します。数十万エーカーを大小の農場に分けて賃貸するイギリスの貴族は立派な企業家ですし、農場を自ら管理しているドイツの大土地所有者も同様に企業家です。販売のために地所を購入する土地会社の、企業家としての性格を否定する人はいないでしょう。利益を得るために、家屋、住居、ホールを賃貸する会社は紛れもなく企業です。

同様に、原動機や作業機の利用を他人に任せるだけで報酬を得る企業家もいます。他人の貨幣を集め、それを貸し出して利子を得る銀行は、巨大企業に発展しました。そして、ここであげられたすべての事例では、土地のそれであれ、可動資本のそれであれ、用役を独立の財として販売する企業家がとりあげられています。それと同じく、自分の労働力の用役を独立の財として市場に出す企業家もいます。個人的な自由を基礎とする私たちの経済秩序では、自分の労働給付を雇用主に販売する労働者は、すべて同じように企業家です。これについては、後に詳しくお話ししましょう。

今日の経済秩序における企業家の類型、即ち、私たちが企業家という用語でそれだけを考えた類型の企業家は、ともかくも、経営の企業家ないし営利の企業家です。例えば、工場をとりあげてみましょう。土地、あらゆる種類の資本利用、労働力利用についての処分権をもっている人々との契約をとおして、工場主は、所有者としてであれ賃借者としてであれ、新たな生産物の製造に必要な生産要素の処分権を獲得し、それらを一定の生産目的に使い、そして、それを自らの計算と危険負担で行います（工場ではなく商事企業の場合も同様です）。けれども、必要な生産要素の処分権のすべてを獲得するためには、工場主は資本をもっていなければなりません。この資本によってはじめて、工場主はうえのようなすべての契約を結ぶことができます。そうであればこそ、イギリスの古典経済学者とそれに連なる人々の場合には、その認識と意志によってはじめて資本を活かす人々が資本所有の背後に隠れてしまっています。そうした人々にとっては、しばしば企業家にあたる用語が存在しません。企業家と資本、企業利潤と資本利潤とは、彼らにとっては同じなのです。フランスの経済学者が、資本を活かす企業家の意義をはじめて明確にした一方で、ドイツの経済学者は一種の中間的な立場をとりました。これは、至極もつともなことです。なぜなら、生産

要因を分離したり結合したりして生産物を創り出す人間の精神も卓越した生産要素です。企業家はこの精神の担い手だからです。このように、企業家は、資本を用いる程度に応じてこうした機能を果たすことができます。その程度に応じてのみ、工場主は、上に述べた生産要因の処分権を有する人々と、その処分権を委譲する契約を結ぶことができます。まさにこの理由から、こうした企業は資本家的企業ともよばれますし、ゾンバルト Sombart はいみじくもそれを定義して、給付と反対給付に関して貨幣価値での一連の契約を結び、それによる物的資産の使用を目的とする経済形態である、としました。こうした資本家的企業が今日の全経済秩序を特徴づけています。まさにそれ故に、私たちはそれを資本家的経済秩序と名づけ、資本主義について語るのです。しかし、この資本主義は魂のないものではありません。資本は企業家の創造的精神の道具にすぎません。シュトロースベルク Stroußberg が株式会社を知性による資本の交接と名づけたのは、当たっていないともいえないのです。そして、企業家の精神は、給付と反対給付とに関する貨幣価値での契約をとおして、自らが処分権を有する物的資産を使用しようとするから、それは、できるだけ大きな利潤を得ようと努めますが、それだけではありません。それとならんで、企業家の精神は、生まれてから死ぬまでの私たちの多くの欲求ができるだけ少ない費用で完全に充足されるようにすることもできます。19世紀の経済生活をそれ以前から際立たせている偉業は、企業家の精神によっています。その偉業というのは、小工業の経営形態から大経営への進歩のことをいうのですが、これによって、工業製品は、かつてはそうしたものなしで済ませねばならなかった数百万の人々の手に入るようになっていきますし、さらにその結果、こうした生産物を製造する労働者もまた、高い生活水準に引き上げられました。農業の粗放経営から集約的経営への進歩は企業家精神のおかげです。そのおかげで、今日では、

以前には1本の穂が生育していたところでも、2本以上の穂が生育しています。地球が交通網でおおわれたのは企業家精神のおかげです。それによって、辺鄙な地域がヨーロッパの前庭となりましたし、そして、現在の支配的な方向からいって、豊かで安価な食糧が得られる可能性もありましょう。このような機能を果たしたことによって企業家が認められるということには、どのような称賛でも足りないほどです。企業家は、「行って、大地を汝の臣従とせよ」という聖書の言葉を真実にしました。

ところが、私が企業家を私たちの今日の経済秩序の精髄だと考えているだけでなく、さらに、その活動を大いに評価しているというのに、私がしばしば企業家層の敵といわれるのは、どうしてなのでしょう。その問いに対する回答は、私の話に必要ないくつかの補足にもなります。私に向けられた批判に結びつけて、そうした補足を行いたいと思います。

1905年9月マンハイムにおける社会政策学会総会において、私は、巨大経営における労働関係に関する討論の基調報告をいたしました。今日、事柄の性質からして、労働条件が1つの工業部門の労働者にとって共通のものである限り、それは、個々の労働者とではなく、そうした労働者をまとめた代表者と取り決められること、つまり、個別的な労働契約が集団的なそれによって代替されること、いわゆる労働協約の締結を、私は懸命に支持しました。それによって私は、大部分の新聞から企業家層の敵と攻撃されました。ケルン県の工業家協会が1905年11月11日に行った討論会で、事態は一層腹立たしいものとなりました。そこでは、シュモラー-Schmoller教授のような私の幾人かの同僚については、少なくとも企業家層を理解しようとする善意だけはもっている、といわれました(“Wirtschafts-Wissenschaft und Praxis. Ein Diskussionsabend im Verein der Industriellen des Regierungsbezirks Köln”, Köln 1905という小冊子をご参照下さい)。キルドルフ枢密顧問官によれ

ば、経済学の他の教授にはこうした善意が欠けているという感じを企業家は抱いている、ということです。そして、この、他の教授というのは誰であるかは、その後の討論から明らかとなりました。出席していた大学教授は次々に登壇して、自らの潔白を誓い、さらにまことに誠実に、企業家の敵であるというあらゆる嫌疑から自分たちの個人的な先生を救いました。それでは、誰が犯罪者だったのでしょうか。ケルン商科大学の教頭の次のような苦言がこれに対する回答となっています。「今日の企業家層にとって城塞が築かれている」このケルンで、経済学の代表者に対抗して、保護関税の代わりに自由貿易を擁護する学者が出てきた、というのです(これは先の小冊子の25ページです)。皆さんの前で、私は労働者の団結権や自由貿易に賛成だということ一度々お話ししてきたのですから、邪悪な学者というのが誰であるのか、皆さんはお分かりのはずです。それは皆さんの前に立っています。そして私は、後悔するどころか、私に向けられた批判を誇りにさえしていることを認めます。というのは、私は、自分で企業家層の城塞の駐留部隊だとは思っておりませんし、もし、ケルン商科大学の方々が、自らを教頭先生の言われたようなものだとお考えだしたら、そうした方々にはお気の毒なことです。そうした人々は、それによってこれまで求めてこられた学問的な性格を放棄されるのです。学問に尽くそうとするものは、自分が何らかの利益のために仕えていると考えてはならず、ただ単に真実に仕えるのです。

私はただ真実のためだけに尽くそうと努めてきたのでありますが、先ほどから皆さんにお話ししたように企業家をほめそやしてきただけではありません。キルドルフ氏が「工業は——これが義務であるのだが——金もうけしなくてはならない。そうでなければ工業はその使命を誤っており、芳しくない」と述べていることには、確かに賛成できます。だからといって、工業が金もうけをするあらゆるやり方が正当化される

わけではありません。その時々欲求に最もよく応じ、それらを最もよく充足するような形態を物質に与えて工業が金もうけをするのであれば、工業は、私が述べてきたような称賛をうけて当然です。しかし、オランダ人は収穫の一部を焼却して残りを販売し、それだけ大きな利潤を得ることができるようにする、とアダム・スミスは述べていますが、そうした方法でも、工業は利益をあげることができます。関税や運賃率によって、あらゆる種類の生産割り当てや価格協定によって、工業が市場における製品の供給を人為的に制限すれば、工業は、なるほどきわめて多額の金を得ることになりますが、しかし、それは、生産諸要素を経済的に利用してその時々欲求を完全に充足して得られるものではありません。緊急性を高めるために、欲求はむしろ意図的に不十分にしか充足されません。その目的は、提供される商品をどうしても必要とする人々から、それだけ多くの金を巻き上げることができるということだからです。そして、こうして得られた金の一部が国内よりも外国でより安価に販売することを可能にする輸出奨励金に使われるとしたら、輸出向け企業家はより大きな利益をあげることができるかもしれません。しかし、国内の加工業者や完成品工場主が常々こうした種類の利得を苦々しく思っているだけではありません。これによってドイツの国民経済が全体として損失を被ることは明らかです。それでは、なぜ輸出奨励金が支払われるのでしょうか。もし、例えば、その生産に我々であれば10を要する商品が他所では8で得られるとすれば、外国はこの商品に対して8以上を支払おうとはしないからです。それでも外国が我々から購入するには、我々もその商品をそこに8で出します。また、輸出向け企業家が損失を出さずにそうした商品を販売できるために、彼らは、国内の購買者が多く巻き上げられすぎた分から2の輸出奨励金を受け取ります。したがって我々は、外国の購買者に10+2の費用を要する商品を受け渡し、それと引き換えに8を受け取

ります。外国に12を渡し、その代わりに8を受け取ることが国にとって有利であると立証するような企業家がラインの企業家層の城塞のなかから出てくることさえ予想されます。

同じように、こうした通商政策を信奉している企業家の労働政策は、今日の経済秩序における労働者の地位の完全な誤認を基礎としています。

私は先に、今日の経済秩序で製造された生産物を、その製造に携わった労働者の生産物ではなく企業家のそれだ、と申しました。なぜなら、企業家の認識と意志によって、労働者の労働給付は他の生産要素と結びつけられ、新生産物になったからです。ゲーテGoetheが『ヘルマンとドロテア』Hermann und Drotheaの原稿をコッタCotta書店に送ったとき、書店はゲーテに、彼が要求した1000グルデンを渡しました。そして、コッタ書店は原稿を活字に組み、印刷して、ゲーテの『ヘルマンとドロテア』という本を市場に出しました。この完成した本は、今やゲーテの生産物ではありませんでしたし、同様に、例えば、この詩を活字に組んだ植字工の製品ではありませんでした。また、それが印刷された紙の工場主のそれでもありませんでした。市場に出された本はコッタ書店の生産物でした。しかし、それだからといって、ゲーテは生産者ではなかったのでしょうか。ゲーテは確かに生産者でした。完成した本の生産者ではなかったとしても、その最も重要な部分、そこに印刷された詩の生産者でした。そして、まったく同様に、植字工と紙の工場主も、前者は労働給付によって、後者は紙によってですが、生産者でした。そのいずれも、コッタによってゲーテの部分生産物と結合して完成した本になっている、2つの部分生産物の生産者だったのです。このように、労働者がすぐに消費できる生産物の生産者ではないとしても、労働者は、だからといって、自らの計算と危険負担で市場に出す独立財の生産者でないというわけではありません。彼もまた、企業家、労働給付の企業家なのです。

かつて、労働者が企業家ではなかった時代、作業している経営に労働者が埋没していた時代がありました。労働者はまだ自立した経済の単位ではなく、主人の経営における小輪にすぎませんでした。それは労働者の人格的な隷属の時代でした。自分自身の経済の進歩に対する関心から、主人は、働かせている労働者が業績に対する関心に目覚めるようにしました。これによって労働者は次第に解放され、ついにはその完全な自由が宣言されました。労働者に属している生産要素の処分権、即ち、労働力の使用は、もはや他人に属するものではありません。労働者だけがこれについての排他的な権利を有しています。食料を労働力に変えることによって、特殊な熟練を身につけることによって、また、自分の意志でこのように蓄積された活力を解放し、それを生産過程で活動させることによって、労働者は自分の労働力を変形します。このように、現存の物質と力の形を変えて、それがより大きな有用性をもつようにするので、労働者は生産者です。労働者は、これを独立の財として労働給付の購買者に提供します。それは、自己の計算と危険負担でなされます。労働者は労働給付の企業家です。自由の宣言は労働者自身に責任を負わせることになりましたが、これによって、労働者は労働給付の企業家となりました。そして経済的には、まさにこの企業家という属性のなかに労働者の自由が示されています。

しかし、資本主義的な経営企業家は、主人から労働の単なる購入者へのこうした転化に必ずしも馴染んではいません。既にアダム・スミスは、ここから生じる困難に言及しています。幸いなことに、賃金協約締結の増加は、全体としてみれば、こうした主人気取りがなくなりつつあることを示しています。けれども、巨大な経営では、それだけますますしぶとくそれが維持されています。法律に示された地位を援用して労働者が労働条件について討議することを要求すれば、多分、討議する用意はあるが、それは

個々の労働者とだけである、即ち、主人として諸条件を一方的に決めうる限りにおいてである、と説明されるでしょう。あるいは、ちょうど1905年1月のようになります。1月9日にドルトムント上級鉱山局から、鉱夫が行ったのと同じく、仲裁裁判所に提訴するようにフーゴー・シュティンネスHugo Stinnes氏が要請されたとき、彼はこれを拒否しました。係争点は、単に彼の炭鉱だけではなくライン・ヴェストファーレンの全炭鉱の全体的な利害にかかわっている、というのがその理由でした。このように、争われている労働条件は、単に個々の労働者の個別的な労働条件ではないばかりか、個々の工場の個別的な労働条件でもない、ということは認められました。しかし、こうした労働条件に該当する労働者全員が雇用主に問い合わせたとき、労働者とは討議できないということでした。というのは、労働条件の決定は、個々の工場と個々の労働者との間の問題だということです。その後、1週間にわたって全ドイツを不安に満ちた緊張に陥れ、国民経済全体に危機をもたらした、あの大規模なストライキとなりました。これに対して、キルドルフ枢密顧問官は、「残念ながら我々には金もうけの義務がある」といっていますが、それでは十分ではありません。それが全体の利害と重なっている限り、私は、こうした努力の正当性、いや必要性を十分に認めてきました。しかし、そうした努力がなされる様式が全体の利害と対立するものであれば、その限りではありません。

さて最後に、企業家層の将来について少しお話ししましょう。

今日多くの人々が、私的企業家層は終末を迎えつつあると考えています。多数の巨大企業の銀行による支配は、全企業家層が1つの全体企業に吸収される端緒であり、これは、すべての企業の国家の経営への移行であるとみられています。この推論は誤っている、と私は思います。とくに全体の経過はそれほど一様ではありませんから、様々な結果が出てくる可能性があります。

す。さしあたってはこうした経過がまったくみられないような、きわめて進んだ国々があります。それに、我が国においても、最近では、銀行よりも巨大工業企業はるかに優勢であるといわれています。ところで、誰が支配しているにせよ、被支配企業の吸収というのは問題になりません。被支配企業に対する支配企業の永続的な参加による支配がなされているところでさえも、被支配会社は単独企業として存続しています。その利益と損失は、その企業のものであり、支配企業が参加している限りにおいてのみ、そうした支配企業の利益と損失です。しかし、これらの巨大な支配企業の立場からみれば、事態の推移が示しているのは、以前から私的企業家層の強さであった主導性の発現ですし、かの結合的な精神の発現です。この精神を、私たちは経済生活における卓越した生産要因として学んできたのですが、それは、できるだけ少ない手段を用いて欲求を完全に充足させるような、生産要素の処分権を手に入れようとして、たゆまず努力します。ここで、すべての企業の国家の経営への移行によって私的企業がその反対物に転化するような地点に到達しているとは考えられません。むしろ、あちこちでは、国家は私的企業の影響下にあるかのようさえあります。この点を措くとして、全企業家層の国家の経営への移行の仲介者として考えられている銀行についてはとくに、これまでは大銀行経営の内部

組織においてのみ生じてきた業務分野の分割が、外部に向かって露となり、それによって、大銀行は再び分散しそうに思われます。しかし、その他の点では、私的企業家層の時代には達していないように思われます。その課題がまだ果たされていないからです。私たちはやっと、私的企業がこれまでほとんど未開発であった地域を開発するような発展の入り口に立っています。そして、これまでの経験では、国家ではなく私的主導性に委ねられていればいるほど、こうした開発をめぐる競争において、種々の国が勝利者となります。個々の国民の国民経済が世界的になればなるほど、私的企業の活動範囲は広くなり、その未来は大きくなります。しかし、私的企業がその課題を実り豊かに、そして対立なく、したがってそれだけ自らには有利に果たすことができるのは、次のような条件次第です。その条件というのは、私的企業が、今日の経済秩序の1つの基本原理である個人的自由を労働関係の様式においても無条件に承認することですし、また、そうした企業の生産物が充たすはずの欲求を萎縮させ、それによって価値を上昇させるという方法によるのではなく、生産手段を最も経済的に使用して欲求をできるだけ完全に充足させ、それをとおして金もうけをすることです。これが私的企業の指針をなす見地である限り、なおその終末は予想することはできません。